

脳に刻むことで 読書の味わいが深まる

本の世界にもデジタル化の波が押し寄せています。昔ながらの紙の本を読むのと、電子化された本を読むのでは、脳の働きに何か違いがあるのでしょうか？ もし本がすべて電子化されてしまったら、読書体験はどう変わるのでしょうか？ 読書家としても知られる、言語脳科学者の酒井邦嘉さんにお話をうかがいました。

1冊の本を所有するとは
著者のメッセージを丸ごと受け止めること

「同じ内容の電子書籍と紙の本では、紙の本のほうが

はるかに価値が高い」と、酒井さんは断言する。

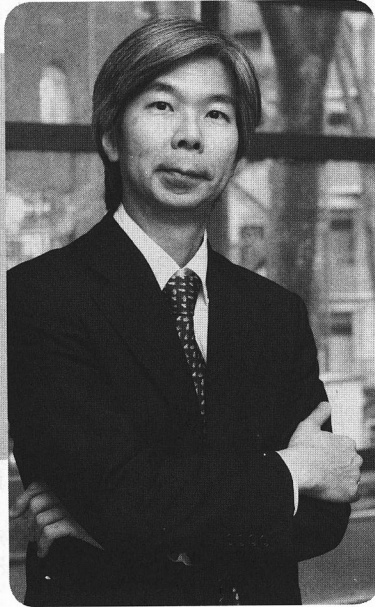
「紙の本には、活字以外にも多くの情報がこめられています。判型、装丁、ページのレイアウト、そして紙の質感によって1冊の本が形作られ、それらが本に個性を与えているのです。

同じ小説であっても、単行本と文庫本とは重さや手触り、たたくまいが違いますし、古い本であれば、紙の黄ばみ具合や匂いなどから時間の流れを感じ取ることができます。

一方、電子書籍の場合は、どの本もスマホやタブレットの画面に、画一的なフォーマットで同じように表示されてしまいます。内容はそれぞれ違ってい

たとしても、そこには個性と呼べるものがありませ
ん」

紙の本とは、そこに確と存在しているものだ。カ
バーデザインからはじまって、用紙の種類、タイト
ル文字の書体、はては文字の間隔にいたるまで工夫
をこらして、その本が持つ世界観を具現化している



さかい・くによし●1964
年東京都生まれ。東京大学
大学院総合文化研究科教
授。言語脳科学および脳機
能イメージングを専門とし、
人間にしかない言語や
創造的な能力の解明に取り
組んでいる。読書家として
も知られ、『言語の脳科学』
『脳の言語地図』『脳を創る
読書』『考える教室』『科学
という考え方—アインシュ
タインの宇宙』など多数の
著書がある。

のである。

「著者や編集者
の想いが如実に
本作りに反映さ
れているのが紙
の本であり、文
章以外の部分に
も、全体にわた
って著者の
メッセージがち
りばめられてい
るのです。

本を読む醍醐
味は、本の内容

を通して、書き手について想いを馳せること。1冊
の本を所有するとは、本に託した著者のメッセージ
を丸ごと受け止め、それを体感することなのです」

本の個性によって五感が刺激される

文章が収められているだけでなく、個性を伴った
一つの作品として存在する紙の本。単に文字を追う



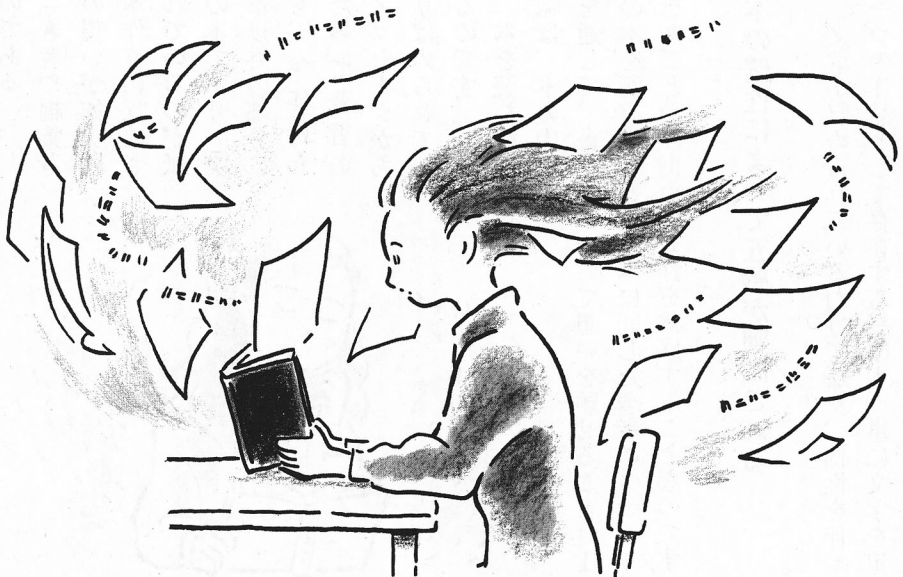
だけでなく、本の重みや厚みを感じながら、今、自分が全体のどのあたりを読んでいるのか無意識のうちには把握しつつ、ページをめくっていく。こうした身体感覚を伴うことによって、本の情報はより深く脳に刻まれていくのだという。

「われわれの脳は、複雑にすることでより深く記憶するという不思議な性質を持っています。例えば『ナクヨウぐいす平安京』というように、歴史の年号も語呂合わせにして余計な意味づけをして記憶しますよね。

効率を重視するなら、『794』と数字だけを覚えるほうがいいはずなのに、単純すぎると逆に覚えられない。むしろ複雑にすることでより多くのことを覚えられるのです。

読書も同じです。表紙から受ける印象、本の感触、ページをめくる音など、五感を使って読むからこそ、内容が胸に響く。だからこそ、読み終わったあとに『あのくだりはよかった』『あの言葉が心にしみた』と余韻が残り、あたかも自分が体験したかのように味わい深いものになるのです」

さらに、紙の本は、あとで記憶を手練り寄せる際の大きな手がかりにもなる。





「紙の本は大きさや厚さ、形がバラバラです。書棚にたくさんの本が並べてあっても、本のたたずまいの特徴を覚えていれはすぐに目当ての本を探すことができません。しかし、電子化されてしまうと特徴がほぼ失われてしまいますから、書名を忘れたら、それこそ探し出すのに苦労します。

読んだ痕跡えんせきが残るというのも紙の本のいいところです。エンピツで線を引ながら読むのが好きという人は、それが「ブックマーク」になります。また

気に入って何度も同じページを読んでいると、自然に開きグセが刻みつけられるのです」

とはいえ、電子書籍には、紙の本にはないメリットがある。

「電子書籍であれば、一つのタブレットに何百冊も入れることができます。場所をとらず、手軽に携帯でき、劣化しないという点ですぐれています。

また、読みやすい大きさに文字のサイズを変えられる点も、ペーজレイアウトが崩れるというデメリットはあるものの、視力が衰えた人にはありがたい機能といえるでしょう」と酒井さん。

便利さや効率が重視される現代社会、デジタル化が進む一方だが、本の世界もデジタルに取って代わられてしまうのだろうか？

「電子書籍の登場で、紙の本の素晴らしさに改めて気づくことができました。紙の本の文化が、私たちにとっていかに大切なものであるかを再確認するきっかけにしましょう。電子書籍か紙の本か、どちらか一つを選ぶのではなく、目的や用途に応じて使い分けられないのでしょうか。どちらのよさをも享受できる恵まれた環境に生きていることを、噛みしめていただきたいと思います」